

## ド・クインシー著「異教の神託」 ——ドクサと二律背反——

浜 川 仁

### 要 旨

1936年に出版された『陽光のなかの焰』のなかで、著者ウェスト (Edward Sackville West) は、「エッセネ派」と「秘密結社」については、極めて辛口の評価しか与えていない。ウェストの不満は、ド・クインシーの主張が、歴史的な裏づけを欠き、「趣味の悪さと蒙昧ぶり」(West, 307) が目につくというものである。そして、これらのエッセイとは異なり、ウェストは、本稿で焦点をあてる「異教の神託」を高く評価する。しかしこれらのできばえは、ほんとうにそれほど違うのだろうか。これらをその他のミステリーについてのエッセイと読み比べるとき、ド・クインシーの奇を衒うようなスタンスに、人びとの蒙を啓くためのいかなる戦略が浮かび上がってくるのだろうか——小論では、カントの「二律背反」(アンチノミー) を手掛かりに考察をすすめていく。

ロマン派の英国人作家トマス・ド・クインシーは、謎に魅せられた作家である。まず彼の著作の中には、古代史の迷信や偏見、また現代になおびこる多くの誤解を扱ったものが数多くある。たとえば、近年和訳された『著作集』第二巻の中からおもなものを挙げるだけでも、まず「異教の神託」(初出1842年)と「秘密結社」(初出1847年)、「ト籓と占星術」(初出1848年)、そして「薔薇十字主義者とフリーメイソンの淵源に関する史的批評的研究」(初出1824年)や「イスカリオテのユダ」(初出1853年)がある。もっともよく知られている『英吉利阿片服用者の告白』(初出1821年)をはじめとして、彼の膨大な回顧録のなかにも、ミステリアスな要素がいろいろなところにちりばめられており、ド・クインシー自身の生涯もまた謎と無縁ではない。じじつ、バレル (John Barrell) の『トマス・ド・クインシーの感染』は、これらの要素を作家精神の「症候」とみなし、フロイト精神分析学を縦横無尽に駆使したスリリングな謎解きである。<sup>1</sup>

そこで、こうしたさまざまな公私のミステリーを、書き手のド・クインシーが誠意をもって (in good faith) 解明しているかという、それが決してそうとはいえないように思えてしまうところが、彼の面白いところである。小論でとりあげる「異教の神託」と「エッセネ派」(初出1840年)、「秘密結社」などがその好例である。これらのエッセイでド・クインシーは、一般の謬見を独自の仮説で乗り越えようとしているのだが、こうして提出される新機軸の多くが、どう

もそれじたい偏見に満ちたものに読めてしまうのである。たとえば、いくつか存在するド・クインシーの伝記もののなかでは、1936年の出版以来、いまでも「屈指の好著」<sup>2</sup>とされている『陽光のなかの焰——トマス・ド・クインシーの生涯と作品』のなかで、著者ウェスト (Edward Sackville West) は、「異教の神託」については高く評価しつつも、「エッセネ派」と「秘密結社」については、極めて辛口の評価しか与えていない。<sup>3</sup> ウェストの不満は、これらふたつの論考で展開される、西暦1世紀当時のユダヤ教三大党派のひとつエッセネ派というのが、じつは原始キリスト教に改宗した人びとを指すというド・クインシーの主張が、歴史的な裏づけを欠き、その「趣味の悪さと蒙昧ぶり」(West, 307) が鼻につくというものである。これら二つのエッセイにおいてド・クインシーの批判のターゲットとなっているのは、キリスト教についての記述は回避するいっぽうで、エッセネ派をことさらに取り上げるローマ在住のユダヤ人歴史家ヨセフス (Josephus Flavius) であるが、<sup>4</sup> ウェストは、このド・クインシーの議論のほうに偏見に凝り固まっているとして論難している (West, 306-307)。

この評価の当否はひとまずおくとして、ド・クインシー批評は、なぜか今日にいたるまで、このように一般の謬見を糺すド・クインシー自身の偏見にさらに裁定を下す、というプロセスをとりやすい。ノース (Julian North) によれば、ロマン主義研究の重鎮であったウェレック (René Wellek) は、1930年代初

頭から60年代にいたるまで、ド・クインシーがカントの哲学をひどく曲解しており、その理論もほとんど一貫性を欠いているとして厳しく批判していたというし、<sup>5</sup>また1990年代に入ってから、前述のバレルの他に、ルゼプカ (Charles Rzepka)、リースク (Nigel Leask) らが、ポスト・コロニアル批評に依拠しつつ、さかんにド・クインシーの「オリエンタリズム」を指摘していた (North, 107-17)。とにかく、ロマン派の詩人や文学者のなかで、これほどひっきりなしに論難の砲火をあびてきた者は他にいないのではないかと思いたくなるほど、英米の進歩的ロマン派研究者らにとって、ド・クインシーはさながら恰好のターゲットであったのだ。

それにしても、ギリシャやローマの古典に精通し、ドイツ語やフランス語などの現代語 (modern languages) で書かれた文献にも親しんでいた博覧強記の文筆家にしては、ド・クインシーの知的パフォーマンスは、どうしてこうもバランスを欠いているように見えてしまうのだろうか。もちろん、ジャーナリストとして糊口をしのいでいたド・クインシーだから、彼がことさら物議を醸すようなことをいって衆目を集めようとしていたことは事実としてあるだろう。ド・クインシーは評論家としてのじしんの奇矯なスタイルに、はたしてじゅうぶん意識的であったのか。もしそうだったとしたら、彼のこの奇を衒うようなスタンスに、古今東西の謎を解明し、人びとの蒙を啓くためのいかなる戦略がかくされているのだろうか。

## 1. 衒いと模倣の文学

ロマン派のなかで、チャールズ・ラムをゆいいつの例外とすれば、おそらくド・クインシーほど自分や周りの人たちのことを、ペーソスを込めてユーモアたっぷりに描いた者はいない。ワーズワスについていえば、彼の詩に叙情はあっても、ユーモアはほとんど感じられないし、コールリッジからは、深い喪失感はひしひしと伝わってくるが、気分を和やかにする軽口はあまりきかれぬ。この二人の著作が発散するロマン派特有のナルシズムが、ド・クインシーのばあいはあまり感じられないのである。

これは、彼がものを書くときに、天与の才能や知性といったものをあまりあてにしなかったからだろう。たとえば、「ト籤と占星術」には17歳のころウェール

ズ地方を徒歩で旅行していたころに会いに行った「幽谷の豚」(モヒナハンテ) という占星術師から、将来赤毛の女性と結ばれ、27人もの子供をもつが、その子たちを捨ててしまうことになるだろうと告げられる話がでてくる。この経験から、ド・クインシーは「占星術はきわめて深遠な——少なくともきわめて高邁な学問」であるが「占星術師はみんなぺてん師なのである」(II, 155) と言い放つが、その説明もまた、彼らしくユーモラスに入り組んでいる。かんたんになると、占星術師たちは、生まれた時の星座の位置からその人の生涯を占うのが通常であるが、この「時」というのはあまりにも大雑把にすぎて正当な測定が不可能であるからだという。あらゆる出来事には時間的な「幅」があり、これが出来した瞬間をその中心時点に求めていくわけであるが、「時間の無限なる分割不可能性」を念頭にいければ「如何なる二つの出来事も、時を同じくしたためしはかつてない」(II, 152) と、ド・クインシーは主張する。ブルズアイを狙ったはずのピストルの弾があらぬ方角へ飛んで行ってしまうように、天宮の厳密な時からすれば、占星術の予測など、まるで大きく向きを変える六頭立ての馬車と変わらない。つまり、人が予見しうる範囲など、たかが知れているというのである (II, 154)。

ロマン派であるからにはナルシストに違いないというのであれば、ド・クインシーの書くものには、知的パフォーマンスで周囲を楽しませようというようなたぐいの陽気な衒いがある。そのため、少年のころ読みふけたというゴシック小説にでてくるような洋館の目が回るほど入り組んだ通路や、胸の高鳴る秘密の部屋のようなすを、そのまま文章化したような彼のスタイルは、通常の学術論文を特徴づけるようなクールな客観性を欠いている。これには、ド・クインシー自身のペダンチズムもあっただろうし、彼の書くものが一般向けの文芸誌のためのジャーナリズムだということからくる要請も、もちろんあっただろう。だが、同業者であったラムやハズリットは、ド・クインシーのようなスタイルをとらなかつたし、彼の文章が『告白』の成功のあと広く模倣されたことが事実であったとしても、ド・クインシーの「肉声」(voice)こそが、商業誌にいちばん合った語り口であったというのは、今でいえば蓮見重彦の文体こそが現代批評にいちばん向いているというのとおなじで、もちろん意味をなさな

い。むしろ、これはド・クインシーが、こうしたいっけん荒唐無稽なスタイルを自覚的に選択したということであろう。

このことについては、多くのロマン主義文学研究者が指摘するところである。たとえば、クレッジ (Alina Clej) は、ハロルド・ブルームの「影響の不安」(anxiety of influence) ボードリヤールの「シュミラークル」(simulacra) の概念に依拠しつつ、ド・クインシーの独特の文体について考察している。ド・クインシーは、ワーズワスの精神的影響下で、コールリッジの著作を手本にすることでジャーナリズムに地位を確立したが、ワーズワスの詩がリアルな自然を指示物として、これと直接対峙しようとしていたのにたいし、ド・クインシーは、きわめて頻繁にミルトンやワーズワスの書いたものを参照する。ワーズワスの詩が現実の「シミュレーション」であったとすると、ド・クインシーの散文は、「現実」や「真実」にいたるために、生の現実を参照しない「シミュレーションのシミュレーション」である「シュミラークル」にあたるといえる。<sup>6</sup>

じじつ、幼児体験や阿片の夢など、ド・クインシーの作品中で特に印象深い描写には、ほとんど誰かの詩が引用されている。その多くが誤って引用されているところを見ると、偉大な作家のあとに産まれてくる表現者たちが、じぶんたちの表現や思想について感じるといわれる「影響の不安」(ブルーム) が表れているといえるだろう。もっともクレッジによれば、ド・クインシーは、彼の阿片常用についての告白や殺人を芸術の一分野として考察するという文章などにもみられるように、資本主義社会における大衆の過剰な消費欲とセンセーションリズムに、ワーズワスやコールリッジなどよりはるかにうまく適応したといえる。物書きとして読者の需要に供しつつ、大衆の消費欲をさらに高めていくというやりかたを洗練させていったのである。こうした一般大衆の感性の鈍化とセンセーションリズムをいちばん嫌い、大都会の喧騒から遠くはなれて、湖畔地方でひっそりとくらす村人たちが「ほんとうに」使っていることばによって詩は書かれなくてはならないと、ワーズワスは考えていたのであったが、その彼を師と仰ぎ特権化しつつも、ド・クインシーは大衆のセンセーションリズムにしっかりと狙いを定めていた。ド・クインシーのこうした傾向については、

ラセツト (Margaret Russett) もまた「ワーズワスが風景を再訪するのにたいし、ド・クインシーはかつて読んだ詩を思い浮かべる」と、軽妙にまとめている。<sup>7</sup> こうした誇大な模倣癖のようなものが、ド・クインシーの文学を特徴づけていることは、疑いがないだろう。

そして、天才が完全にコピーできるとしたら、真理もまた相対的なものにすぎない。以下に論ずる「異教の神託」では、じつはこのことが語られている。

## 2. 「異教の神託」

前述したように、「秘密結社」のばあいとは異なり、ウェストは「擁護できない、パラドキシカルな見解により効力を失わない」(West, 308) と述べ、「異教の神託」に合格点をあたえているが、ド・クインシーは、この中で何を主張しているのだろうか。

大きく二つに整理しよう。まず、ド・クインシーによれば、異教の神託はキリスト教が始まるずっと前から下火になっていた。また、キリスト教が登場してからもこれを習慣とする地域も散見された。したがって、教父たちがいうようにキリスト教の真理の光によってたちどころに雲散霧消してしまったというわけではない。

じつは、この考察はファン・ダーレ (Antoine van Dale) の『異教徒の神託についての論攷』にもとづいており、ド・クインシー自身の考えはあまり入っていない。「異教の神託」を執筆するにあたり、ド・クインシーは、このファン・ダーレの著作にかなり依拠しているが、この本は1683年にアムステルダムで出版され、英訳はアフラ・ベン (Aphra Behn) によるものが1699年に刊行されている (L XIII, 367, n. 15)。ウェストはどうやらこのあたりに感服しているようだが、この考察に関していえば、ド・クインシーは、ファン・ダーレを巧みにパラフレーズしているだけなのである。

ほんとうに興味深いのは、二番目の、ド・クインシーが例によって奇妙な自説を展開しているところである。これは、神託が下されたのは神殿においてであったが、これらの神殿は実質的には人びとの資産を預かり運用する「銀行」だったのであり、こうした金融業務に付随してさまざまな情報が集積する場所として知られていたというものである。つまり、神殿は、「神

託」と「信託」を同時におこなっていたということだ。そこで、古代ギリシャの都市国家と神殿とは、軍事・経済戦略上、もちつもたれつに関係にあったのであり、神官たちは高級財務官僚としての役割を担っていたはずだという。この屈託のない向こう見ずなアナクロニズムを、わたしたちはいったいどのように理解したらよいのだろうか。<sup>8</sup>

さらに、「異教の神託」には、それほど重要とも思えない「十番目の波」という迷信にまつわる、かなり長い余談が本文から独立して挿入されていて、その内容もまた、ド・クインシーが、「十番目の波が他の波とくらべて高い」という古来の言い伝えがほんとうに正しいかどうか、友人でエジンバラ大学倫理学教授となったウィルソン (John Wilson) とともにかつて旅行したさい試しに実測した結果、これが真実ではなかったことが判明したという愚にもつかないものである。しかも、この余談には、これに付随するかたちで、著名な木版画家ビュウィク (Thomas Bewick) の描いた『ビュウィクの四足獣類』(*A General History of Quadrupeds*) についての註釈と、マリー・アントワネットの美しさについてパークの描写についての註釈、さらにワーズワスの「土地の名付けにまつわる詩」(1800年)の一節にでてくる「湖の貴婦人」という表現についての註釈と、計3つの註釈が幾行にもわたって付随している。こうしたやりかたは、ド・クインシーの逸脱癖と緩慢なペダンチズムが、文章のリズムを損なっている最悪のケースのひとつとしか思えないだろう。

不思議なのは、こうした不自然なほど長く、呆れるほど冗漫な余談や註釈について、「秘密結社」にあれば不満をみせたウェストが何も書いていないことである。ウェスト自身のことばをもじっていえば、これほど「擁護できない、パラドキシカルな」脱線につぐ脱線は、彼の評価しなかった「秘密結社」にはない。じつは、この余談とその註釈は、1858年から1860年にかけて出版されたホッグ (James Hogg) による全集において初めて登場したもので、『ブラックウッズ・マガジン』誌上における初出 (1842年3月) のさいには、もともとそこに存在していなかったものである。仮に、ウェストのあげるような理由から「秘密結社」の評価が下がるのであれば、おなじ基準を適用すればこの「異教の神託」などへは、もっと厳しい評価

を与えられてもおかしくはないのである。<sup>9</sup>

このように、ウェストが、いっぽうでは「秘密結社」と「エッセネ派」貶め、そしてもういっぽうでは「異教の神託」を持ち上げるのは、ダブル・スタンダードを適用したとしか思えない。これは彼の評価に、美学的判断によるというよりも、むしろド・クインシーの自国文化鼻根ぶりを嫌う、多文化主義に配慮したりベラルな政治的判断が働いているためだろう。つまり、「秘密結社」と「エッセネ派」では、親ローマ的なユダヤ人ヨセフスを足さまにいうド・クインシーの評価を下げるいっぽう、「異教の神託」においては、古代の神殿に近代経済学の合理的機能を見出すという進歩的姿勢を褒めそやしているに過ぎないのである。これは、文学的価値を図る趣味判断とは、ほんらいまったく異なる基準によるものであるし、ほんたいに美学的判断の分野に限れば、ウェスト自身の批評の偏向も充分議論されてしかるべきだろう。もしこのことが、自明に思えないとしたら、それはわたしたち自身が、ウェストと同じ没美学的判断を無意識のうちに下しているからに他ならない。

さて、文字通り常軌を逸したド・クインシーの逸脱が美学的に妥当かどうかについては、ここではこれ以上問わないとして、「異教の神託」で彼が言わんとしていることは明らかである。それは、宗教の本質というものは、さまざまに解釈可能なものであり、絶対的な真理などないということだ。たとえば、ド・クインシーによれば、教父たちの誤りは未来を予知する能力が異教の神殿にあった筈はないと思い込み、そうした能力はキリスト教にこそ本来的に帰属していると考えたところにある (II, 410)。じつは予知能力がほんとうの信仰を特徴づけているなどと考えることは、教父たちのがわの誤謬にすぎないというのである。「そのような主張は、聖書のどこにも言明されていない」からである (II, 410)。キリスト教のがわからしかものごとを捉えきれなかったと、よく批判されるド・クインシーの名誉回復のためにも、このするどい洞察力の表れている箇所を、以下に是非引用しなくてはならないだろう。

預言者とは、聖書のどこでも、未来のことは見たり予測したりする人を意味していない。それは、釈義能力、すなわち、隠された真理もしくは不完全にし

か明らかにされていない真理に適用可能な解釈の力を備えた人のことである。あらゆる深遠な聖書の真理は、数多く種類もさまざまな、陰翳をおびた隠匿の面紗ヴェールに元来隠されているため、誤った解釈を受けやすいものとみなされるかもしれない。これらさまざまに真理の姿を曖昧にする物のひとつなりとも取り除くもの——評釈において釈義者ないし解釈者の天賦を示す者——が聖パウロの言う意味での、預言者である。(II, 411)

さらに続けて、ド・クインシーは、真理のことばが「遠い未来を取り巻く雲によってたまたま隠されてしまうこと」があり、それを明確にしようとするときだけ、ほんらい御言葉を解釈するものである「預言」が、予知としての「予言」に近づいてしまうに過ぎないという(II, 411)。預言とは、もともと聖書の解釈のことなのである。

イエス以前の預言者たちがそうであったように、教会は神の御心を成就するためのものでなく、神のことばをたんに預かっているに過ぎない。真理というものは、聖書のテキストの絶え間ない解釈によって少しずつ明らかになっていくはずだ、とド・クインシーは考えている。そうやって、少しずつ未来も切り開かれていく。したがって、預言の正統性は、世の中の情報(テキスト)を正しく解釈できるかどうかにかかっている。デルポイ神殿の「神託」が、現代の銀行で行われる資産運用と類比できるのはこのためだ。情報を正しく理解することによって、行動の方向づけがされるように、資産もまたこれを適切に運用することによって、さらなる増殖を続けていくものなのである。異教の神殿は、人びとの資産を預かることにより、彼らの未来をもまた預かっている。このように、預言も神託も、等しく情報解析に関わるものであるとしたら、そのどちらにおいても、下される解釈の正しさは近似値的なものに過ぎないことになる。

そうだとしたら、人が謬見(ドクサ)と思えるものと出くわす時にやれることで、もっとも価値中立的で生産的なことは、これを理解しようと努めることでも、自前の「真実」でこれに立ち向かうことでもない。むしろ、まったく反対の、いつけん少なくともおなじほど受け入れがたいと思えるような別の偏見を、これと突き合わせてみることはないか——古代の神殿が銀

行であったという、ド・クインシーのアナクロニズムの戦略には、こうした見識が隠されているようだ。

### 3. アンチノミー

「秘密結社」の冒頭には、ド・クインシーが少年のころアベ・バリユエルの『ジャコビニズムの歴史のための回想録』を読んで、あるジレンマにおちいってしまったことが語られている。バリユエルによれば、キリスト教を壊滅させるために、群衆の中に姿を隠しつつ、一世紀以上にもわたって活動をつづけた秘密結社の人びとがいたという。神の偉大なる御業を妨害して、いったい何になるのか——幼いド・クインシーはそう考え、この記述を事実として受け入れることを拒んだという。そのいっぽうで、「印刷された事柄は不可避免かつ深甚なる真理なのである」(II, 240)という彼の信念もまた揺らぐことがなかった。そしてじつは、互いに相容れず、矛盾しあうようにみえるテキストの断片が、全体として調和のとれた作品を構成できるかという、このド・クインシー少年のジレンマは、ドイツ観念論の泰斗イマヌエル・カントの開示したアンチノミーと相似形なのである。<sup>10</sup>

カントは、じしんの哲学的思索の総体を、「二律背反」(アンチノミー)と呼ばれる特殊な命題の組み合わせから導きだした。彼の生きていた18世紀中期の西欧哲学は、自我の自明性から世界全体の理解に到達できると信じた大陸合理論と、ひとの意識はすべからく慣習と印象の恣意的な構築物にすぎないとするイギリス経験論という二つの立場に大きく分かれていた。カントは、こうした状況をアンチノミーをめぐる考察によって打開しようとしたのである。アンチノミーとは、矛盾するように思える二つの命題のうち、その対立に中排律が成り立たないものことである。<sup>11</sup> この特殊な命題のありかたの解明を通して、カントはものごとの全体とか原初を完全に理解しようとする、なぜ必然的に形而上学な罠に陥ってしまうのかにも解答を与えようとした。カントの説明によれば、これは途方もなく広い「世界」や限りなく偉大な「神」にとって、理性という物差しがあまりにも小さいからではない。むしろ、人の理性なるものは、あまりに恣意的で伸縮自在なので、推論の基盤としてはきわめて不確実なものにすぎないからだ。これはつまり、合理論と経験論のうち、どちらかいっぽうが正しいとは決していえな

いということだ。この哲学の二大系統は、崇高なアンチノミーのうちにせめぎ合っている。<sup>12</sup>

テキストと作品のどちらを選んだらよいのか悩んでいたかつての自分を、ド・クインシーは、このカントの「二律背反」に言及しつつ描いている。彼によれば、二律背反は、数人一組で即かず離れずに踊るカドリールやリールのようなものだ。まるで〈母なる理性〉が〈母なる真理〉と、さまざまなバリエーションの曲を踊りながら、「赤道直下の現実」(II, 248)にたどりつくことがないというのである。こうした浮ついたパッセージが、かつてウェレックを苛立たせたのだろうが、ここでド・クインシーのいいたいことはおおよそ明らかである。この比喩の直後に「私は必要上、バリュエルを信じた」と彼は記している。「しかし至るところで私の悟性は彼の悟性に反乱した。私は彼の言ったことの総計を盲目的に受け入れた。反抗的に私は各々の文に反駁した」(II, 248)。つまり、「各々の文」(テキスト)はつじつまが合わず理知的に受け入れられないが、「バリュエル」と彼の名の冠された「作品」については、これを全幅の信頼のうちに受け入れなくてはならないということである。これは、「世界」や「神」に対し、ひとがこれらを決して理性で完全には把握できないながらも、無意識の確信をもつてのぞむことと同じなのである。

## おわりに

わたしたちの現代社会とその反映である大衆文芸やポピュラーカルチャーは、ド・クインシーの時代にもましていっそう奇を衒うものや物議を醸すもので満ちている。そのほとんどは、とうてい納得のいく説明ではないし、また心から賛同できる主張でもない。しかし、いっばうで、こうした荒唐無稽な物語や常軌を逸した言論に、わたしたちが生の欲望のレベルでしっかりとつなぎとめられていることもまた事実なのである。

評論家の小谷野敦が、こうした現象について興味深い指摘をしている。小谷野によれば、特に戦後言論界でよく売れて話題になった評論や思想書は、純粋なエンターテインメントと学術書の間位置するものであり、厳密な仮説立証にとうてい耐えることのできない、いわゆる「トンデモ本」のたぐいが意外に多いという。<sup>13</sup>ただし、小谷野にとってもこれは必ずしも悪

いことではないようだ。硬派の文学研究が、自然科学ほどではないにしても、歴史や思想史、文献学上の地味な検証作業をあるていど要求するのにたいして、小林秀雄を泰斗とする文芸批評は、その思考の枠組みと、探究のダイナミズムにおいて、分析対象であるはずの作品をはるかに凌駕するほど野心的である。文芸批評とは、「全体性」への果敢な考察や、常識(ドクサ)を打ち砕く閃きや発想の転換をその生命力とする、形而上学的な戯れなのである。

そこで、ド・クインシーのことを、現代日本の文芸批評家たちと類比できないだろうか。批評家たちは、数限りない出版物、造形物、絵画、パフォーマンスの中から、一定の規範を定立することで、ありとあらゆるものを結びつけ、あるいは切り離す。文芸批評をもっともよく特徴づけているのは、こうしたしなやかな象徴的構成力なのである。秘密結社や迷信をめぐる一連のエッセイにおいて、ド・クインシーがいわんとしているのは、これらが排除すべきまやかしにすぎないということではなく、むしろこうした思い込みなしでは人は生きられないということである。この世界の歴史や広がりにも始まりも終わりも認めることができないように、これを解釈する作業にも終わりなどありはしない。たとえば、たまたまあるところにたつて一方が右でその反対は左だといってみるように、現代の読者はテキストの意味をもとめて、一方に「作者」を、他方には「作品」を見出すことになるが、これらはそもそもひとつの意味作用が産み出す二匹のキメラにすぎない。薔薇十字主義者やフリーメイソンなど秘密結社の「ペテン師」たちの謬見(ドクサ)こそは、文化の象徴作用を維持し、または刷新するというスリリングな機能を果たしていたといえる。ド・クインシーもまた、数々の持論で奇を衒いつつ、自らその役割を買って出たのである。この文化の解釈学は、同時代のコールリッジの実践と軌を一にするもので、ビクトリア朝のアーノルド、そして20世紀のT・S・エリオットらへと受け継がれていくだろう。

だとしたら、これらの洞察や思想が今日ではもう古臭く、パラドキシカルで、偏見に満ちていると感じられたとしても、それは取り立てて驚き怪しむべきことではないかもしれない。わたしたちの受けとる衝撃と興奮だけは、紛れもなくそこにあるのだから。

## 註

本稿においてド・クインシーの著作からの引用は、主に松村伸一訳、『トマス・ド・クインシー著作集II』（東京：国書刊行会、1998年）よりおこない、巻と頁数を（II, 340-416）のように略して示す。引用したエッセイすべてが底本としているDavid Masson, ed., *The Collected Writings of Thomas De Quincey*, 14 vols. (Edinburgh: Adam and Charles Black, 1889-90)への言及はMと略記し、近年刊行されたGrevel Lindop, gen. ed., *The Works of Thomas De Quincey*, 21 vols. (London: Pickering & Chatto, 2000-03)はLと略記する。

<sup>1</sup> John Barrell, *The Infection of Thomas De Quincey: A Psychopathology of Imperialism* (New Haven: Yale UP, 1991)を参照。パレルは、さまざまなイメージを遁走曲のようにたたみかけるド・クインシー独自の手法“involute”に、最愛の姉エリザベスとの死別を原光景（primary scene）としながら、この阿片常用者の性的存在としての自己へのあくなき探究を読み取っている。

<sup>2</sup> II, 550にみられる解説者・鈴木聡の評価である。

<sup>3</sup> Edward Sackville West, *A Flame in Sunlight: The Life and Work of Thomas De Quincey* (London: Bodley Head, 1974) 306-08.

<sup>4</sup> 「エッセネ派」において、ド・クインシーは、ユダヤ三大党派の一つエッセネ派というのが、じつは初期クリスチャンたちのローマの世を忍ぶ仮の姿であったという。自説の根拠として、ド・クインシーが挙げているのは、以下のような点である。たとえば、エッセネ派の人びとは医療活動に熱心であったことが知られているが、これはイエスがらい病患者などの病人たちを癒したことに倣ったことと、医師として地域を訪問することで民衆を周囲に集め、布教活動をより効果的に推進しようとしたことを示唆するものである、とド・クインシーは推測する（L XI, 482-83）。また、どのようにエッセネ派が香油を忌避していたという記述については、まず贅沢をしないということと、それにもまして「油を注がれた」（聖別された）ものとしてのイエス・キリストへの畏敬の表れであっただろうと考察する（L XI, 484-85）。他のどの党派よりも週の安息日を重んじるということについては、初期クリスチャンたちが、当初モーゼの律法への遵法意識の高い仲間のユダヤ人たちを改宗させることに心血を注いでいたからであると説明し、キリスト教がユダヤ教を統合・包括するものであって、けっして排除しようとしているのではないことを周囲に分からせる必要があったのだと主張する。ド・クインシーによれば、現代のローマ教会が安息日の習慣を取り入れているのは、じつにこのころの名残なのである（L XI, 486-87）。

<sup>5</sup> Julian North. *De Quincey Reviewed: Thomas De Quincey's Critical Reception, 1921-1994* (Columbia, SC: Camden House, 1997) 124-30を参照した。

<sup>6</sup> Alina Clej, *A Genealog of the Modern Self: Thomas De Quincey and the Intoxication of Writing* (California: Stanford UP, 1995) 273の註14を参照。

<sup>7</sup> Margaret Russett. *De Quincey's Romanticism: Canonical Minority and the Forms of Transmission* (Cambridge: Cambridge UP) 20を参照。

<sup>8</sup> また、さらに理解に苦しむのは、ド・クインシーが、自身のギリシャ神殿銀行説のめぼしい根拠として、古代ギリシャでは、ローマと違い、家屋が「薄くてもろい建材」（II, 399）できていた

という「事実」を挙げていることである。そのため窃盗がはびこっており、人びとは金品を自宅に保管しなくなっただろうというのである。さらに、これではさすがに少し心もとないと感じたのか、ド・クインシーはよくやるように冗長な註釈を挿入している。ところが、その内容たるや、古代ギリシャではあまりにもどろぼうがはびこるため、戦いに勝利した榮譽を讃えるトロフィーまでもが木彫りであったという、どうでもいいようなことなのである（II, 400-02）。

<sup>9</sup> 『著作集』第二巻の「解説」で、鈴木聡が説明するところによると、ウェストは『陽光のなかの焰』を執筆するにあたり、ホッグ版の全集を踏襲するかたちで「異教の神託」をおさめたマッソン編集の著作集しか参照していないようである。そうすると、この問題の余談と註釈についてウェストが何も触れていないのはおかしい。このバージョンしか読んでいないはずだからである。さらに、鈴木がこの「解説」のなかで、ウェストの「秘密結社」への評価が厳しい理由を付度し、この作品が「ド・クインシーの一方的な思いこみの強さと、それをささえるべき論拠の弱さのみが目立つことによるのだろう」（II, 550）と記しているのにも、首をかしげてしまう。論拠の薄弱さでいえば、「異教の神託」も同じだからである。

<sup>10</sup> もちろんこの疑問は、テキストをめぐるポストモダンな問題意識にも直結している。このことについては、ロラン・バルト著、花輪光訳『物語の構造分析』（東京：みすず書房、1980年）、特に79-89頁「作者の死」、91-105頁「作品からテキストへ」を参照されたい。これらのエッセイで、バルトは、「作品」や「作者」という考え方が、ものごとの実体や意味にとらわれていてドクサ（思い込み）にすぎないとして批判し、これに対し「テキスト」は、ほんらいつねにパラドキシカルで、意味から自由で戯れに終始する拡散的、暴発的な読書をせまるものであるという。

また、ミシェル・フーコー著、蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成 III 歴史／系譜学／考古学』全10巻（東京：筑摩書房、1999年）223-66頁「作者とは何か」の中で、フーコーは、「作者」というものは公共の言語活動に加えられる、ある種の「縛り」のことで、その「機能」は時代や文化によってさまざまだという。例えば、近現代以前には、民間に広がる説話や演劇、神話、詩歌など、今日では文学作品とされるような言説について特定の「作者」が云々されることはなかった。今日、われわれが「作者」についてとくにこだわらない種類の言説としては、科学的な言語活動があげられるだろう。だれがどこでどんな形で発表したかは、その言説の真実性と直接関係してはいない。ところが、中世までの西洋の長い伝統の中では、こうした科学的言説にこそ「作者」が必要とされていた。「ヒポクラテスが言った」といえば、「これは既に証明済み」というのと同じことだったのである。今日のように、文学や思想などの領域で、特定の言説の「所有」や「帰属」などが真面目に考えられるようになったのは、十八世紀末から十九世紀初めにかけて、ヨーロッパで著作権（コピーライト）が法制度化されたことをきっかけにしているから、歴史的にも文化的にも、かなりローカルな現象であるといわざるをえない。「話し手が誰かなど、問題ではない」という時代も来るかもしれないのである（フーコー、252）。こうして、フーコーも、バルトとおなじく「作者の死」を予見している。

<sup>11</sup> それでは、このアンチノミーとはいったい何か。『カント入門』（東京：筑摩書房、2005年）81-84頁で、石川文康があげる分かり

やすい例を使ってまとめて見てみよう。石川は、以下の四つの命題を挙げ、4通りに組み合わせてみる。

- ① すべての鳥は飛ぶ
- ② すべての鳥は飛ばない
- ③ 若干の鳥は飛ばない
- ④ 若干の鳥は飛ぶ

真の矛盾においては、どちらか一方が必ず「真」であるため、他方が「偽」である場合、もう一方の正しさを証明することができる。これを中排律という。例えば、①の「すべての鳥は飛ぶ」という命題には、③の「若干の鳥は飛ばない」という命題が対立するが、この場合前者は間違っており、後者のほうが必ず正しいのである。また、②「すべての鳥は飛ばない」と④「若干の鳥は飛ぶ」という二つの命題間の関係も、同じく真の矛盾であるといえることができる。これらを「矛盾対立」と呼ぶ。

アンチノミーとは、これら矛盾対立ではないケースにあたる。まず、「反対対立」と呼ばれるアンチノミーには、たとえば、①の「すべての鳥は飛ぶ」という命題と、②の「すべての鳥は飛ばない」という命題が二つとも、ともに「偽」であるようなケースがある。これは、本来の意味での「矛盾」ではない。対立するように見える二つの命題のいずれも誤りであり、これら二つの命題は、ある意味で矛盾以上の対立関係におかれているといえる。いっぽう、矛盾以下の対立もまた考えることができる。これが「小反対対立」として知られる二つめのアンチノミーである。これは、③「若干の鳥は飛ばない」と、④「若干の鳥は飛ぶ」から成る、二つの命題のいずれもともに「真」であるようなケースである。この場合は、命題の一つが正しいからといって、他方が間違っていることにはならない。

<sup>12</sup> カントによれば、アンチノミーとは思念の崇高な対立のことである。カントの四つのアンチノミーをまとめると以下のようなになる。

- ① 世界は空間・時間的に有限か、それとも無限か
- ② 世界は単純な部分から成るか、それとも単純ではないものから成るのか
- ③ 自由はあるか、それともすべてが因果に支配されているか
- ④ 万物の原因となる絶対に必然的な存在者はいないのか、いないのか

これらのうち、はじめの二つ①と②は、「数学的アンチノミー」である。これは、かなり単純化していうと言語が世界を認識するさいの分節機能にかんするものであり、③と④の「力学的アンチノミー」は、論理体系や概念のプライオリティー（優先順位）にかんするものである。ひとは言語によって世界を分節化（概念化）するとどうじに、これらの概念を系統づけることにより世界に秩序と歴史をあたえようとするが、こうした理性の働きが暴走し、「超越論的仮象」（ドクサ）を生ずることがないようにするというのが、カント批判哲学のめざしたものである。

①と②のアンチノミーは、いずれの命題も立証しようがないから、そのどちらも誤りとすべきであるという。この①と②のアンチノミーそれぞれ二つの命題の後者にあたるものは、いわゆる「無限判断」である。ちなみに、柄谷行人著『定本 柄谷行人集 第3巻 トラ

ンスクリティーク——カントとマルクス——』全5巻（東京：岩波書店）95-96頁で、柄谷はこれらを「有限ではない」あるいは「単純ではない」のような「否定判断」と混同すべきでないという。否定判断だとすると、肯定判断である最初の命題とのあいだに排中立法が成り立ってしまい、いずれかが正しいことになるからである。だが、ほんとうは「世界は有限だ」と「無限だ」（第一のアンチノミー）、あるいは「単純だ」と「複雑だ」（第二のアンチノミー）は、いずれも二つの「肯定判断」だから立証できないのである。これに対して、③と④のばあいは、いずれの命題も誤りとはいえないから、そのどちらも正しいと考えていかななくてはならない。これらのアンチノミーは、「自由」と「神」の存否を問うものであるが、いずれの立場をも尊重しなくては、現実の社会生活は成り立たない。たとえば、あるひとの犯した罪が、自由意思のみによるとかながえても、社会環境のみによると考えても、刑罰は妥当性を欠いてしまうことになるだろう。

<sup>13</sup> 小谷野敦著『評論家入門 清貧でもいいから物書きになりたいたい人に』（東京：平凡社、2004年）21-40頁「評論とは何か」、同じく小谷野著『反＝文藝評論 文壇を遠く離れて』（東京：新曜社、2003年）7-32頁「序章「文藝批評」とは何か」を参照。

〈付記〉以下は、1842年3月『ブラックウッズ・マガジン』誌上で初めて発表されたときには存在していたが、その後マッソン版を含む全集で削除されたテキストである。本論でとりあげたキリスト教における預言についての考察と深く関連しているの、拙訳で恐縮であるがここに掲載する。なお、注釈番号は最新のリンドップ版全集のものと同じである。

こうした教えは、キリスト教の啓示のうち知られている目的のどれにも必ずしもそぐわない、という理由で通常しりぞけられる。（だが、この議論は消極的なものに過ぎず、またこうしたコミュニケーションを、*lucro ponatur*「利益」や、<sup>79</sup> 過分のお情けのようなものとみなすことを可能にできたし、確かに期待できるというまでにはいかないが、与えられたらその分だけキリスト教では得になるとされてきた。）こうした議論はさておき、わたし個人の考えは、もっと緻密で強力で、この問題を別の論拠に据えており、状況に適い紙面がもっとあれば、次のことをその主張において暴き、明示することであろう。すなわち、人びとの思うように、我等の信仰の創設者たるものが、たんに面白そうな疑問にさりげなく遠まわしに光を当ててやったなどという、どちらにも転んでいたようなたぐいのことではないのである。神によってなされた唯一の啓示は、あの世<sup>80</sup>で人びとがどんな性関係や交わりを持つのかについてであった。しかし、それは、子供じみたユダヤ人たちのあいだですでに広まっていた、ある品のない卑俗な考えを食い止めるためのものであり、断固とした*averruncatio*「回避策」<sup>81</sup>なしでは、きっとこの考えは今日にいたるまで蔓延していたであろう。それが目的なのであって、不浄な好奇心を満足させるためではいっさいなかった。ここでいっているのは、未来において、婚姻を回復させるといふあの権利のことだ。この印象深い事例は、当時のユダヤ人の念頭にあった、あのひどく子供じみた官能主義を余すところなく暴きだすものであり、彼らが悪魔について抱いていた信条にも間接的に光を当てている。この比類のない一目瞭然のたった一つの例外を除けば、科学についてであろうが、霊界のミステリーについてであろうが、権能ある預



言者が空想的好奇心を満たすため、ほんのかすかな啓示のきらめきも授けるようなことは絶対になかったのである。本件についての正しい見解は、こうした抑制が単なる偶然ではないことを明らかにするだろう。教えの労が不必要に負担とならないよう単に便宜を図ったというのが、現在の議論のせいぜいたどりつくところである。だがそうではなく、厳格、絶対の、強固な整合性への要請によって、こうした啓示を差し控えるのが本義とされていたのだ。もしこうしたお情けが、たわいのない好奇心を抱いた者に、一度でも与えられていたとしたら、たちどころに、神の摂理の別の広漠たる付随的意図に割れ目と亀裂が走ったことだろう。

キリスト教時代にユダヤ人が置かれていた状況を全て勘案すると、教父たちは、邪悪な靈感という考えにつき、好きなように疑いをさめると思っていたかもしれない。しかし、操っている霊が、神託の背後にあった有力な媒体だと考えるとして、いつも善や悪と結びつけて描かれてしまうのはいったいなぜだろう。悪魔たちが、美や力や予知能力の面で人間を超えているとしても、ひとの徳性についてはそれ以外の如何なる影響も与えないと考えてみてはどうだろうか。また、かりに反抗する天使たちがいるとしても、どうしてこれほどがさつで余計なしかたで、人間との非常に卑しい間柄を悪魔にあてがい、これら媒体を貶めてしまうのか。こうして、こっそり非難中傷するというのが、その役目だといわんばかりである。この考え方から、ミルトンの「没落した大天使」<sup>82</sup>は、ひとりの中傷者(*diabolos*)となって泥棒の助っ人へと身を落とし、そこからイタリア語の*diavolo*を中間形として、私たちの*devil*「悪魔」というグロテスクで俗な表現へとすすんでいく。\* この考えは、他の低俗な概念すべてと同じく、偉大で神聖なる宗教にとっては有害である。神託が霊的存在のミステリアスな媒体によって行われるとしても、たんに支配力や知性によるものなのか、計り知れない邪悪さによる

ものなのかを区別することはできただろう。神託は、結果としてはひとに益をもたらしていた。そして、教父たちが、正当に知り得たのはこのことだけだったのだ。それなのに、教父たちは邪悪で反抗的な天使たちのことを不当にも語り始めることで、聴衆をこっそり欺いたのであり、これは迷信が消滅したということと、それがたんに休眠し廃れつつあったことを区別しようとしなかった欺きと、おなじものであった。(L XIII, 129-30)

\* キリストも*devil*ということばを使ったじゃないかと、無学な人は言うかもしれない。だが、そうではない。使われたことばは *διαβολος*<sup>83</sup> である。訳は「批難する者と彼の天使たち」<sup>84</sup> である。

79 *lucro ponatur* 「利益としてこれを置こう」。

80 あの世 マルコ伝12章18~27節への言及。ここでキリストは天国には結婚はないといい、ド・クインシーが「卑俗な考え」とよんでいるものを避けている。この考えによると、女性は来世では二人以上の夫を持つこともある。

81 *averruncatio* 根絶すること、あるいは忌避する行動のこと。

82 ミルトンの「没落した大天使」ミルトンの『失樂園』1章591行目に言及している。

83 *diabolos* (ギリシャ語) 「非難する者、中傷者」のこと。

84 「批難する者と彼の天使たち」 黙示録12章9節と12章10節では、悪魔と我等の兄弟を非難するものについて述べている。単語の*devil*は、ギリシャ語の*diabolos*に由来し、「偽りの非難をする者」という意味がある。

# Prejudices and Antinomies: De Quincey's "Pagan Oracles"

Hitoshi Hamagawa

## Abstract

Edward Sackville West, in his well-known biography of Thomas De Quincey, *A Flame in Sunlight*, offers a negative critique of De Quincey's "Secret Societies" and "On the Essenes." West claims that the opium-eater's arguments in these essays lacked historical evidence, and they are distinguished by "bad taste and ignorance" (p. 307). West acknowledges that he prefers another essay of the same topic, "The Pagan Oracles," which is the focus of this present paper. Are these essays, however, as different as West seems to suggest? In comparing these two essays, as well as others that explore similar themes of "secrecy," I aim to uncover an unlikely strategy that De Quincey employs as he flashes what seem on the surface to be outrageous opinions. My aim is to offer some curious mode of enlightenment on behalf of the reading public. Kant's "antinomy" will prove a useful concept to understand the opium-eater's fascinating mind.